

武蔵野日曜集会

怒の器・憐の器

——ローマ書第9章14～33節——

1978年10月1日(武蔵野)

小池辰雄

神の選 憐憫の器・怒の器 別な器 頑固にされたのは砕かれるため 神さまの熱心 キリス
 トの十字架が砕け 贖われたる器 神さまの義と愛の現れ

【ロマ9・14～33】

14 然らば何をか言わん、神には不義あるか、決して然らず。15 モーセに言い給う『われ憐まんとする者をあわれみ、慈悲を施さんとする者に慈悲を施すべし』と。16 然れば欲する者にも由らず、走る者にも由らず、ただ憐みたもう神に由るなり。17 パロにつきて聖書に言い給う『わが汝を起したるは此の為なり、即ち我が能力を汝によりて顕し、且わが名の全世界に伝えられん為なり』と。18 されば神はその憐まんと欲する者を憐み、その頑固にせんと欲する者を頑固にし給うなり。

19 然らば汝あるいは我に言わん『神なんぞなお人を咎め給うか、誰かその御定に悖る者あらん』20 ああ人よ、なんじ誰なれば神に言い逆うか、造られしもの、造りたる者に対して『なんじ何ぞ我を斯く造りし』と云うべきか。21 陶工は同じ土塊をもて此を貴きに用うる器とし、彼を賤しきに用うる器とするの権なからんや。22 もし神、怒をあらわし権力を示さんとと思しつつも、なお大なる寛容をもて、滅亡に備れる怒の器を忍び、23 また光栄のために預じめ備え給いし憐憫の器に対して、その栄光の富を示さんと為給いしならば如何に。24 この憐憫の器は我等にしてユダヤ人の中よりのみならず、異邦人の中よりも召し給いしものなり。25 ホゼヤの書に『我わが民たらざる者を我が民と呼び、愛せられざる者を愛せらるる者と呼ばん、26 「なんじら我が民にあらず」と言いし処にて、彼らは活ける神の子と呼ぶるべし』と宣給える如し。27 イザヤもイスラエルに就きて叫べり『イスラエルの子孫の数は海の砂のごとくなりとも救わるるは、ただ残りの者のみならん。28 主、地の上に御言を成し了え、これを遂げ、これを速かに為給わん』29 また『万軍の主、われらに裔を遺し給わずば、我等ソドムの如くになり、ゴモラと等しかりしならん』とイザヤの預言せしが如し。30 然らば何をか言わん、義を求めざ



りし異邦人は義を得たり、即ち信仰による義なり。

31 イスラエルは義の律法を追求めたれど、その律法に到らざりき。32 何の故か、かれらは信仰によらず、行為によりて追求めたる故なり。彼らは躓く石に躓きたり。33 録して『視よ、われ躓く石、礙ぐる岩をシオンに置く、之に依頼む者は辱しめられじ』とあるが如し。

● 神の選

今日のところは非常に難しいところです。これをいわゆる分かると言つたら間違いで、分からないのが本当です。

アブラハムの子イサク、そしてイサクの子にヤコブ——ヤコブは後にイスラエルと言われた——とエサウの二人がいました。9章11節、

11 その子いまだ生まれず、善も悪もなさぬ間に神の選の御旨は動かず、

12 行為によらずで召す者によらん為に『兄は次弟に事うべし』と、

神さまの思し召しによらんためであると。創世記25章にあります。

レベカに宣給えり。13 『われヤコブを愛しエサウを憎めり』と録されたる如し。

神さまがえこひいきするようなことが書いてある。弟のヤコブを愛して兄のエサウを憎んだと。マラキ書にもそのことが引用されています。しかし、ヘブライ語でこの場合、「退けた」というような意味で、特に我々が感ずるような「憎む」という意味ではない。言葉に躓かないように。

それよりかずつと前にカインとアベルの話があつて、カインの献げ物、これは穀、野菜や穀物であつた。アベルのは小羊。カインの献げ物を神さまは喜ばないで、アベルの方を喜ばれた。そこで、カインが妬んでアベルを殺したという話があります。これも非常に躓きになる話で、聖書には躓きの話がずいぶんあります。それでは、神さまは不公平ではないかと、パウロがそこで自問自答しながら進んでいくわけです。

14 然らば何をか言わん、神には不義あるか、

ある者を選び、ある者を選ばない。ある者を退けるといふような。義というけれども、あまり義と言えそうではないではないか、そういう疑問が発すると。

決して然らず。

パウロが、決してそういうわけではないと。

15 モーセに言い給う『われ憐まんとする者をあわれみ、慈悲を施さんとする者に慈悲を施すべし』と。

そう書いてある。出エジプト記33章19節です。別なヘブライ語が使つてあるが、この場合は、憐れむ、慈悲を施す。神さまが人に対するその憐れみです。

「汝らの父の慈悲なるが如く、汝らも慈悲なれ」



とルカ伝の山上の垂訓の終りの方で言っておられる、あの字です。マタイ伝では「神の全くが如く全かれ」

と。神さまの全きは慈悲深い。愛という。愛が即ち全さです。

「徳の全きは愛なり」

とありますが、そういうわけです。旧い訳は「恵む、憐れむ」となっています。

16 然れば欲する者にも由らず、走る者にも由らず、

人間の意欲です。そうすると、「求めよさらば与えられんというが、求めてはいけませんか」なんて、平面論理でいくと、そういうことになる。

「欲する者にも由らない。では、神さまの一方通行だったら、こっちはどうしてくれるんですか」

というわけですよ。走る」というのは非常に努力することです。それにも由らない。

ただ憐れみも神に由るなり。

普通の人たちが読んだら、何ごとかと思うですよ。

● 憐憫の器

17 パロにつきて

エジプトの王さまの通称です。

聖書に言い給う『わが汝を起したるは此の為なり、即ち我が能力を汝によりて顕し、且わが名の全世界に伝えられん為なり』と。

その一つの器にすぎないと。

18 されば神はその憐れみと欲する者を憐れみ、その頑固にせんと欲する者を頑固にし給うなり。

固にし給うなり。

今度は「頑固」という言葉が出てきた。さつきは「慈悲と憐れみ」だから、似たようなものですが。今度は、

「頑固にせんと欲する者を頑固にする」

という。「憐れまんとする者を憐れみ」はまだいいとしても、「頑固にせんと欲する者を頑固にする」とは、これは弱ってしまう。実存は、ユダヤ人は頑固な民である。旧約聖書にも書いてある。

「お前たちは項強き民である」

なんて言う。このユダヤ人というのは「項強き」ところが正直ある。今でもキリストを受けとらないし、「パウロは間違った」なんて言っているし。パウロはまた頑固のチャンピオンだったけれども、砕かれた。そういう頑固な民。また、神さまは「妬みの神」であるなんて、そういう妙な言葉を使っている。サタンに愛されては大変だと。

「神さまは妬むほどに愛したもつ」



なんて、ヤコブ書にも書いてある。どうも仏教的な思想からいうと、聖書は非常にしつこくてやり切れないわけです。

19 然らば汝あるいは我に言わん『神なんぞなお人を咎め給うか、頑固に神さまがするなら、咎めたら、自分を咎めることになりはしませんかと。誰かその御定に悖る者あらん』

「そのように決まっているのだつたら、どうにもならんじやないか。人間の側には何も責任はないじやないか。無責任でいいんですかと、そう言うかも知れない」というわけです。

20 ああ人よ、なんじ誰なれば神に言い逆うか、造られしもの、造りたる者に對いて『なんじ何ぞ我を斯く造りし』と言うべきか。

「あの人にはあんなに才能があるのに私には一向に才能がない。どうもこれは不公平だ。しかし、それは神さまがそう造つたんだ」と、こういうように言っているわけです。

21 陶工は同じ土塊をもて此を貴きに用うる器とし、彼を賤しきに用うる器とするの權なからんや。

食器も造れば便器も造るといふようなわけで、同じ材料でいろいろなものを造るわけです。

22 もし神、怒をあらわし權力を示さんと**滅亡に備れる怒の器を忍び、**

「怒の器」というのは、その器が怒るのではない。神さまの怒の対象になっている器ということですよ。

23 また**栄光のために預じめ備え給いし憐の器に對いて、**その栄光の富を示さんと為給いしならば如何に。

神さまの為さんところで、こつち側から言つところのものではないと。

24 この**憐の器は我等にしてユダヤ人の中よりのみならず、異邦人の中よりも召し給いしものなり。**

キリストを信ずる者という意味です。

●怒の器

パウロはこのような事を、今何を背景にして言っているかという、ユダヤ人はキリストを受けとらなかつた、十字架につけてしまつて信じなかつた。パウロは自分もそうだった。パウロは神さまの怒の器であることを自分は知らなかつた。知らないで、自分自身がキリスト及びキリストを信ずる者に向かつて反抗してたわけですから、自分も神さまの怒の対象になった怒の器みたいな者だった。ユダヤ人が、自分の仲間も相変わらずさうだと。

「自分が間違えたから、この頑固な間違っているユダヤ人を何とかして救いたい」というのが9章の始めに読んだところですよ。

「そのことは私がどんなにユダヤ人を、同僚を救いたいと思うか、良心も聖霊によ



って証しする」
と彼は言っている。

「わが骨肉の為ならんには、ユダヤ人のためならば、私はキリストに呪われて捨てられても構わないんだ」

と。それほどまでに、
「自分のかつての間違いを繰り返すな」

と、切々と言っている。今のユダヤ人は神さまの怒の器になっている。自分もかつてはそうだった。けれども今度は、十字架で復活のキリストにひっくり返されて、本当の贖罪が分かったと。

「我はキリストと共に十字架せられたり、もう生きていない。わがうちにおいてキリストが生きていらっしやる」

と。御霊のキリストです。そして、彼は憐憫の器になった。

「今までの自分を塵芥の如く思う」

と言ったわけでしょう。そういった非常にドラマチックなコントラストを彼自身が体験している。それで、私は、神さまの真理は非常に劇的なものだと言っているわけです。

「神はその憐まんと欲する者を憐み、その頑固にせんと欲する者を頑固にし給うなり」

という、その中身は誰も分からない。誰も分からないが、神さまの中に非常に深い、一人ひとりをもまた国民を見る洞察があるわけです。頑固にどんなにされても、神さまは頑固にしつぱなしとは書いてない。「滅ぼさんと欲する者を滅ぼす」とは書いてない。頑固、傲慢。しかしながら、本当の審きでもって滅ぼしてしまうところまでは、もちろん書いてない。

頑固にされているのにも、大きな神さまのわけがある。憐れまれているのにもわけがある。こつち側が偉いからでも、多少いいから憐れまれているのでもない。一切のこちら側の何かではない。こちら側の何かの要素もあるでしょう。けれども、それをもって我々が判断するようなものではない。ユダヤ人は今、頑固にされているが、やがていつかパウロと同じように悔改めるときが来ると、そのときは世の本当の終りになる。しかしながら、万人が本当に、全世界が悔改めるなんてことはない。これはもう聖書が黙示録で言っている通りです。むしろ、だんだん不信になる。

「末の世に信を見んや」

とキリストが言われたように、不信の現象は20世紀の今、現在を見てもそうですね。お互いにどんなに判断し合ったって、みんな相対的なことでダメなんです。個人関係、社会の問題にしる、国際関係にしる、神との関係を自ら立てて、そこで決着していない限りは絶対に世界には平和はこない。大事なのは縦の関係、平安です。平安がないところに平和は絶対にこない。



●別な器

エレミヤ記18章2節に、

「²汝起て陶人の屋にくだれ。我かしここに於てわが言を汝に聞かしめんと。

³われすなわち陶人の屋にくだり視るに輻轡をもて物をつくりおりしが、⁴その泥をもて造れるところの器、陶人の手のうちに傷ねたれば、彼その心のま
まに之をもて別の器をつくれり。」(エレミヤ18・2～4)

イスラエルの民は傷ねられてしまった。頑固になってしまつて、そこでそいつをいっぺんぶつ壊して、別な器を造つた。パウロが正にこの別な器になつたわけです。キリストにぶつ壊されて、別な器に造られた。別の途とか、別の人とか、別な器とかいう言葉がある。サムエルに油注がれ、聖霊を受けたサウルは別な人になつた。それで「手当たりしだいにやつていい」と言われた。それはもう神の霊が来ているから。やつたところが、しかし、霊の世界は恐ろしいので、霊的傲慢になると、神の霊がサタンに切り替わる。そこで、サウルはとんでもないことになつた。

「⁵時にエホバの言、我にのぞみていう。⁶エホバいう、イスラエルの家よこの陶人のなすが如くわれ汝になすことをえざるか。イスラエルの家よ、陶人の手に泥のあるごとく汝らはわが手にあり。⁷われ急に民あるいは国をぬくべし破るべし滅ぼすべしということあらんに、

ここでは、「滅ぼす」とまで言つてしまつた。

⁸もし我がいいしところの国その悪を離れなば、我之に災を降さんとおもいしことを悔いん。

神さまの側も悔いて、これをやめるよと。いわゆる運命論でも何でもありません。

⁹我また急に民あるいは国を立つべし植べしということあらんに、¹⁰もし其の国わが目に悪く見ゆるところの事を行わが声に遵わずば、

即ち、大いに認められていけるけれども、そいつが従わなかつたら、

我これに福祉を錫えんといひしことを悔いん。」(エレミヤ18・5～10)

神さまの側の計画も変わるぞと。神の深い御意は一貫している。けれども、計画や現象面ではいろいろ変わってくる。一貫しているものは何かというと、本当に救おうという、その深い心は一貫している。しかしながら、あるときには頑固になる。あるときは棄てる。あるときは滅ぼす。北イスラエル、南ユダの国は両方とも滅ぼされてしまつた。預言者たちが神の審判を大いに言った。けれども、その滅びの中から憐れみ深い消息を語つたのが第二イザヤ——イザヤ書41章から55章——というわけです。

神は本当は万人救済の深い慈悲を持つていらつしやるんだが、しかし、それだからよしよしなんていうような憐れみ方ではない。嵐もくれば、無風帯もくる。ベートーヴェンの第六シンフォニーみたいなものだ。神の究極的な憐れみということにおいては一貫してい



るけれども、そこまで持つていくには、人間のこちら側の在り方によって神さまは自由自在に変える。頑固にしつぱなしにしておかれることもある。顧みない。顧みざる顧みとうやつだ。憐れまざる憐れみと言つてもいい。

●頑固にされたのは砕かれるため

私自身が相当にドラマチックな者だから、そういうところを通して神さまにドラマチックに鍛えられている。皆さんも結局、人生はドラマなんだよ。聖書はドラマだと申し上げている通りなんだ。決して、組織神学ではない。人間の頭で組織的にでつちあげられるような神さまでは絶対にならない。分かつたらウソなんです。分からないのが本当なんです。神さまのすることは分からない。

「地獄に行くことは私にとつて必定である」

と親鸞が言つたでしょ。それでもなお、親鸞は如来の信を、「南無阿弥陀仏」を信じぬいた。

「たとえ汝が我を殺すとも」

とヨブは言っている。そういうのは神一切、聖意一切という。キリスト自身がこの聖意一切で貫いたわけです。

「わが意にあらず、汝の聖意をこの私を通して、してください」

と。諦観しているのではない。だから、申し上げておるとおり、キリストは無者なんです。自分を何者ともしないから、無限無量のものがやってきた。

ペテロもキリストと直々にいたときはまだダメなんだ。沈んだり、躓いたり、転んだりだ。けれども、聖霊が来てからは、ガラリ変わってしまった。使徒行伝のペテロ、ヨハネ、ヤコブはみんな、福音書のペテロ、ヨハネ、ヤコブよりもはるかに次元が違つてしまった。ハッキリ質的に。これは絶対に聖霊の世界です。

今のキリスト教界がこのことに本当にもういつペン目醒めなければダメです。聖書の研究をいくら微にいり細にいりやつても――学問は学問で結構ですよ――けれども、聖書は学問では分からない。ヘブライ語やギリシヤ語なんて知らなくたつて一向に差し支えない。眼光紙背に徹するという。文字は暗号ですから、そういったドラマの中に自分を入れていけば、神さまが我々を導く導き方は様々だ。悲しいことにつくわしたり、困ったことにつくわしたり。とにかく、どれにおいても、

「神・キリスト一切」

と言つて、この中心を持たなければ。持たなければと言つたつて持てない。それは何かとというと、要するに御霊なんです。

エレミヤ記18章はパウロのここのとこにまたちようど似合うところですよ。頑固にされたのは、今度は本当に砕かれるためだ。そうしたら今度は、救いは凄くなる。だから、頑固にされようと、憐れまれようと、どつちだつていいんだよ。それでいいと言つたのではない。



そのプラスの環境、マイナスの環境において、どっちにおいても、

「本当に神を捉むか、キリストを捉むか」

ということだけが問題なんです。けれども、頑固になっているときは、ちつとも分らない。だから、如何に自分が頑固であるかを、いつか何かでぶつかって、「ああ、しまった。間違っていた」と、そこへ来なくてはダメです。頑固がいいなんて言っているのではない。旧約のヤコブも一生懸命に求めていた。結構なんです。けれども、彼は髀の樞骨をはずされた。いっぺんやつつけられなければ、ヤコブはイスラエルにならないんですから。キリストは山上の垂訓で、

「恵福なるかな、霊の貧しき者、憐れみある者、心の清きもの……」

と言われた。ああいう人たちはみんな憐れまれる方の人たちです。まあ、どっちにしても、いい加減なことはいけない。

「どっちつかずのいい加減なのは地獄の外へ出される。天国も地獄もこれを入れる

ことを恥じる」

とダンテも書いている通り。

「生ぬるき者は吐きだす」

と黙示録にも書いてある。

● 神さまの熱心

「求めよ、さらば与えられん」

という。「まだ求め方が足りないから与えられません」なんて、そうではない。「神さまの方では与えようとしておられる」ということに気がつかなければいかん。こちら側の熱心ではない。神さまの熱心です。神さまの側の熱意、神の求め、神の叩き。神さまは私たちの魂の扉を叩いている、

「開けろ、開けろ」

と。黙示録の、

「われ戸の外にて叩く。汝開かば、私は入って行って一緒にご飯を食べるよ」

なんて。そういう神の求め、神の尋ね、神の叩き。これに気がつけばいい。本当の信仰はみんなそうなんですよ。上からのものに気がつかなければいかん。

こっち側からの求めというところ——祈りもそうです——何か熱心に祈れば、それで聴かれると思っっている。キリストが何かそんなようなことを仰っているところがあるものだからね。困るよ。本当の深い、強い祈りは、上からの神さまの本願を受けとる角度が出てくると、それが本当になる。楽になる。そうでなかったら、「ワッショイ、ワッショイ」とやっただけで辛くなるよ。黙っていたって、本当の深い世界に入ってしまう。だから、

「エン・クリスト(キリストの中に)」



ということですが。

無教会では、「エン・クリスト」ということを知らない。これは聖霊がなければ、このこととは言えない。無教会に聖霊がないと私は言ってます。けれども、どうも薄い。「十字架、十字架」と言って、十字架のこつち側からばかり十字架を見ている。十字架という門にぶつ倒れて、向こう側に行かなくては。そうしたら、「エン・クリスト」の世界に入る。十字架を通らなければ、「エン・クリスト」には入らない。十字架のこつち側で、「十字架、十字架」なんて言ったってダメだ。内村先生や藤井先生や塚本先生が手前ばかりだなんて、私は言っているわけではありません。けれども、残念ながら使徒たちの、使徒行伝のような、ああいう深い現実からは何と言っても次元的にずれている。

神さまがどう造ろうが、造りそこなおうが、どういう器にされようが、こつち側で言うことではないんだと。どんなにできそこないに見えても、みんなそれぞれ天下一品に造られている。だから、「落ちこぼれ」なんて、けしからん言葉だ。みんな一人ひとり、何か天から賜ったところの得手があるわけです。それは大工仕事であろうと、左官屋さんであろうと、畑仕事であろうと、何だっという。今のキリスト教が聖書の本当の世界に入って、

「我に有るもの」(使徒行伝3:6)

という聖霊を持たないからダメなんです。皆さん、本当に聖書一巻を熟読含味して、身に着けてください。あなた方は一人ひとり伝道者ですよ。

●キリストの十字架が砕け

そういう「滅亡」に備える怒の器を忍び」という。「怒いかりの器、憐あわれみの器」と題に書きましたが、神さまの怒は実は、憐れみの別な表現です。神の怒は別な形の愛なんです。神さまに怒られていることは、まだ顧みられて愛されていることなんです。だから、問題は、怒の器が「すみません」と言って平伏すか、平伏さないかだけにかかっている。

十字架の両側に盗賊がいた。十字架を受けるにふさわしいことをした。片方は最後の瞬間に悔改めて、

「せめても私を憶えてください」

と砕けた。そうしたら、せめてもどころではない。

「今日、汝、我と共にパラダイスにあり」

と。キリストと一緒に真先に天界に往った。これは砕けの魂だ。もう片一方は、

「お前は神の子なら、俺たちを救ったらよかろう」

なんてやっている。だから、傲慢は滅亡。傲慢は最大の罪です。霊的な罪なんです。サタンは傲慢なんだ。サタンは傲慢で頑固。頑固の反対は砕けだから。

「我等の罪のために砕かれて、我等に平安を与う。その傷によりて我等は平安を与えられたり」



と。イザヤ書53章です。だから、これが人類を二つに分けている。砕けたから憐れまれた。頑固を通していると滅亡へ行く。救われるか救われないかは、砕けの一つです。

その砕けも、人間の手放しの砕けではまだ当てにならない。我々は砕けた顔はしているけれども、この砕けが十字架なんです。これが、キリストの十字架が砕けなんです。十字架を受けとれば、もう私たちの相対的などんなこともはや問題でない。現在も過去も未来も問題ではない。それが十字架の贖いと言うんですから。いかなることでも問題でない。もう降参しましたから。だから、本当の砕けは、キリストの砕けの中に自分を入れることです。

「われキリストと共に十字架せられたり」

と、パウロのこれが本当の砕けです。

「もう生きてません。けれども、キリストがわがうちに在りて生くるなり」

とは何ですか。聖霊のキリストではないですか。キリストの御霊ではないですか。プロテスタントはあのガラテヤ書2章20節を何回も言っている。何回も言いながら、

「キリストわがうちに在りて生くるなり」

を本当にやってないではないですか。そこがぼけてしまつて、ただ「十字架、十字架」とやっている。神さまは贖つた者に聖霊を与えないではいられないんですよ。それなのに、「それは要りません」とやっているんだ。

聖霊の現象が起きていると、「あれはおかしい」なんて、何を言っているか。使徒行伝をどうしてくれるんですか。皆さん、本当に使徒行伝を読んで、パウロ、ヨハネ、ペテロになつてください。

「わが内に有るもの。私なんか問題ではない。わが内なる者が問題なんだ」

と。ゲーテも、

「上なるものに対する畏敬の念、同等なるものに対する畏敬の念、下なるものに対

する畏敬の念。最後は、内なるものに対する畏敬の念」

ということを言った。「内なるもの」というのは、本来、神の似姿に造られているこの内なるものことです。人間は神の似姿に造られている。ゲーテは十字架ということは言わなければいけません、そういった即の世界は彼の魂は受けとつていた。だから、彼は大きい。「ゲーテは十字架がないから」なんて、すぐ切ってしまうような切り方をしたらダメです。まあ、私みたいに広く、ちゃんと見るものを見ている人は案外いないんだな。

●贖われたる器

要するに、怒の器であろうと、あわれみ憐の器であろうと、神さまの最も深い顧みがあることを、この言葉でもつて受けとらなければいかん。我々自身が、あるときは怒の器になつてしまつているのではないですか、現実には。また、本当に信じているときには憐の器に。究極においては我々は怒と憐の、最後は贖われたる器です。贖われたる器には本当に御霊が来ていな



ければ、本当の贖われたる器とは言えない。パウロはそこまでここでは言っていないけれども。私たちは贖われたる器です。救いは確かです。誰が何と言おうと、救いは確かなんです。何となれば、十字架を無条件に受けとり、御霊をいただいているから。現実の自分はどうなにかに躓いたり、転んだりしようが、そんなことは関係ない。

本願の現実というものを本当に受けとっているから、「南無阿弥陀仏」「南無妙法蓮華経」の本当の世界を、あの親鸞や日蓮というのは受けとっていたから、あれだけのことになった。そうしたら、みんなああいう人を通して不思議なことが起きていますよ、正直。だから、私は一流の坊さんたちが、いい加減な神学者や牧師さんよりか、はるかに素晴らしいと思っ

ている。けれども、キリストはケタ違いです。このケタ違いの中に入るんだから、こんなうれしいことはないではないですか。

「われキリストのうちにな」

なんて、もう力が満ちてしようがない。

我々は同時に怒の器と憐の器であるが、しかし、それよりも深く我々は贖われたる器であるということをおはハッキリ申します。憐れまれていても悪いことをすれば、怒の器になる。怒の器でも今度は、「悪かつた」と平伏せば、憐の器になる。これは相対的現実だ。根源の現実とは贖われたる器であります。しかし、人間は根源の現実になり切っていない。それを持っている。相対的現実では相変わらずこの怒の器と憐の器です。しかし、もう一つ奥のところでは、この贖われたる器なんです。これが本当の世界。人間なんて、そんな割り切れたものではない。だから、ドラマチックだと言っている。

● 神さまの義と愛の現れ

25 ホゼヤの書に『我わが民たらざる者を我が民と呼び、愛せられざる者を愛せらるる者と呼ばん、²⁶「なんじら我が民にあらず」と言いし処にて、彼らは活ける神の子と呼ぶるべし』と宣給える如し。

ホセア書1章のところ。イザヤ書にも似たような言葉が別にある。イザヤ書65章、

「我はわれを求めざりしものに問いもとめられ、我をたずねざりしものに見出され、わが名をよばざりし国にわれ曰らく、われは此にあり我はここに在り」と。(イザヤ65・1)

即ち、異邦人たちが——イスラエルの民でない——いわゆる選民でない者たちが呼ばれて、イスラエルの民よりも、選民よりも選ばれないご連中が先に選ばれてしまって、救われてしまつて、選民が一番後回しになつてしまつたと、パウロはそう言っているんだ。お前たち、後回しになつてしまつてしようがないではないかと。

我々が選ばれたことは、贖われたことは、本当に選びの世界に人をいれる使命を持つて



いる。伝える使命を持つている。福音を受けとつていて、伝えなかつたらダメですよ。一人びとりが伝道者、一人びとりが祭司です。あの「祭司」という言葉は、いわゆる宗教的な祭儀をやるような坊さんなんていうことではない。

ホセアの奥さんに、おもしろくない子ができてしまったんですよ。けれども、それが、憐れまざりし者が憐れむ者になってしまう。

27 イザヤもイスラエルに就きて叫べり『イスラエルの子孫の数は海の砂のごとくなりとも救われるは、ただ残りの者のみならん。』

「残れる民」という言葉が出てくる。「落穂拾い」というのは、残りのものが拾われていく。我々は残りの者、イスラエルの民でパウロも残り者です。残り選ばれた者と同じことです。

「呼ばれる者は多いけれども、本当に選ばれる者は少ない」ということを前に私は話したとがある。

28 主、地の上に御言を成し了え、これを遂げ、これを速かに為給わん』
これもイザヤ書の言葉です。

29 また『万軍の主、われらに裔を遺し給わずば、我等ソドムの如くになり、』

ゴモラと等しかりしならん』とイザヤの預言せしが如し。
イザヤ書というのは大変なところだ。これは第一イザヤのところでは、

それで、私が一番先に、難しいところだ、分からないところだと言いましたけれども、しかしながら、もう一つ深い意味で、頭で分かったのではなくて、あなた方は納得されたいと思います。

パウロのローマ書9章の「怒の器、憐の器」も、相対的現実ではこれを厳かに思わなくてはいかん。と同時に、もう一つ奥の贖われたる器というところを、この根底を持たなかつたら、これの相対的意味が捉めない。そういうことで、要するに、これは義と愛なんです。神さまの義と愛の現れです。義と愛はキリストの十字架において、聖霊において現れ、ただ贖いのところに現れたわけです。

